外国語教育メディア学会（LET）
関西支部 2023 年度秋季研究大会
プログラム

日　時：　2023 年 11 月4日（土）10：15 ～ 17：30

場　所：　立命館大学大阪いばらきキャンパス B 棟 3F
（立命館いばらきフューチャープラザ）
〒567-8570　大阪府茨木市岩倉町 2-150
https://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/oic/

主　催：　外国語教育メディア学会（LET）関西支部
http://www.let-kansai.org/

事務局：　外国語教育メディア学会（LET）関西支部事務局

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35
関西大学外国語学部　田村 祐 研究室
E-mail:　kansailet@gmail.com

プログラム

9:45-15:00　**受付■** 立命館大学大阪いばらきキャンパス B 棟 3 階

10:15-16:00　**賛助会員展示■** B 棟 3 階 受付前ホール

10:15-10:30　**開会行事■** コロキウム

司会◆ 田村　祐　（事務局長・関西大学）
挨拶◆ 名部井 敏代　（支部長・関西大学）

10:40-12:10　**ワークショップ１■** コロキウム（ハイブリッド形式・オンライン参加可）

SNS を参考にした「紙上でコミュニケーションする言語活動」

講師◆ 奥住　桂（埼玉学園大学）
司会◆ 大和 知史（関西大学）

ワークショップ２■　B275（ハイブリッド形式・オンライン参加可）

外国語（英語）教育学研究の進め方：いつ、どこで、何をするか？

講師◆ 鬼田 崇作　（同志社大学）
司会◆ 戸田 行彦　（滋賀県立守山中学校・高等学校）

12:10-13:10　**昼食**

13:10-15:00　**研究発表・実践報告・教材開発**　① 13:10 - 13:40　② 13:50 - 14:20　③ 14:30 - 15:00

第１室（研究発表・Classroom Tips・実践報告）■ コロキウム

司会◆ 今尾 康裕（大阪大学）

① [研]スピーチ課題におけるフィードバックの効果：ZPD に働きかける訂正フィードバックとリフォーミュレーションの比較
近藤 佐知（関西大学大学院）

② [CT]高校生へのライティング指導の在り方について：フレームワークを用いた論理表現の取り組み
松木 龍太　（大阪学院大学高等学校）

③ [実]演劇ワークショップを通じた英語の表現力向上：プロジェクト発信型英語プログラムの取り組み
大山 渓花（立命館大学・龍谷大学・一社)ACCD 大学コンソーシアム）
近藤 雪絵・木村 修平（立命館大学）

	第２室（実践報告）■ B275 司会◆ 神谷 健一（大阪工業大学） ① ［キャンセル］~~[実]SSML を利用し学習者の能力に応じた TTS 合成音を作り込む~~ 東 淳一（神戸学院大学） ② [実]反転学習形式の発音トレーニングプログラムの開発：授業外での動画視聴と授業内のコミュニケーション活動の連携を意識して 近藤 暁子（兵庫教育大学）・山本 大貴（信州大学）
15:00-15:20	**休憩（意見交換会および賛助会員展示）**
15:20-17:20	シンポジウム■ コロキウム（ハイブリット形式・オンライン参加可） **「誰のための研究か、何のための研究か」** 司会◆ 菅井 康祐（近畿大学） 講師◆ 浦野 研（北海学園大学） 田村 祐（関西大学） 南 侑樹（神戸市立工業高等専門学校）
17:20-17:30	**閉会行事■** コロキウム 司会◆ 田村 祐　（事務局長・関西大学） 挨拶◆ 今井 由美子（副支部長・同志社女子大学）
17:50-19:50	**懇親会■** B 棟１階　ライオンビアホール 司会◆ 近藤 雪絵（立命館大学） 挨拶◆ 大和 知史（副支部長・関西大学）

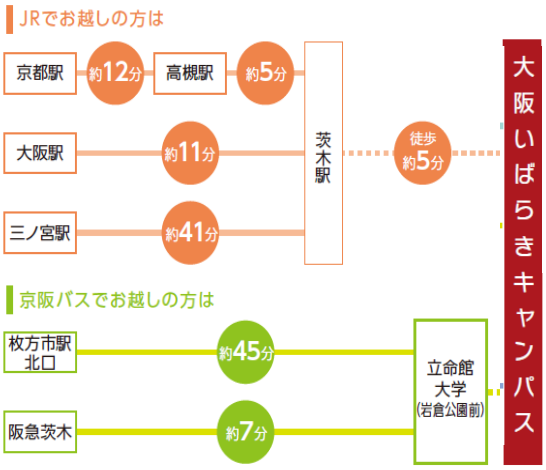
お知らせ

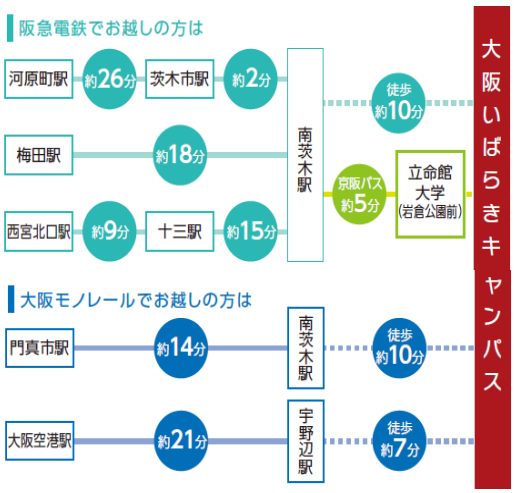
- 参加者は必ず以下の URL から Peatix にアクセスし、事前に参加申し込みをしてください。

  https://peatix.com/event/3711833/view?k=44ac0e94d51bfa0f797a45ee6617e5568fd6e384
- オンライン参加者には、前日までに Zoom のリンクを送信いたします。
- 立命館大学大阪茨木キャンパス B 館 3F（フューチャープラザ）は JR 茨木駅東口から表示に沿って正門まで約 6 分、正門から 10 分程度の距離にあります。時間に余裕をもってご来場ください。
- 対面での参加者は，受付にて必ずネームホルダーをお受け取りください。
- 当日会場近くのコンビニ・みなめん cafe 等が営業していますが混雑が予想されます。昼食等をご持参いただくことをおすすめします。
- キャンパス内は全面禁煙です。
- 発熱等、体調のすぐれない方は来場をご遠慮いただきますようお願いいたします。
- 懇親会は、B 棟１階ライオンビアホールには開催いたします（先着 50 名，11 月 1 日（水）締め切り）。参加申込フォームより申込のうえ当日受付にて参加費（一般 4,000 円、学生 2,000 円）をお支払いください。

会場への交通案内・会場案内図

学内には駐車スペースがありませんので，必ず公共交通機関をご利用ください。





SNS を参考にした「紙上でコミュニケーションする言語活動」

奥住　桂（埼玉学園大学）

その昔「mixi」という SNS がありまして（今もある！）、誰かからメッセージが届くと、トップページに赤文字で「新着メッセージが〇件あります」などと表示されていました。その文字を見ると妙にドキドキしたもので、赤文字が載ってないかなと不必要に何度もログインしてみたりとすっかり「赤文字中毒」になっていた記憶があります。（「足あと」なんて仕組みも同様です。）

これは私だけではなかったようで、当時「mixi 疲れ」なんて言葉も出回りましたので、SNS というものがユーザーの承認欲求を過剰に刺激しながらアクセス増加（運営会社からすれば「広告収入の増加」）を目指している媒体であることが広く知られる機会にもなりました。

それなのにその数年後には懲りずに、今度は「ツムツム」なんてパズルゲームにハマりました。これがゲームとしてのシンプルな面白さだけでなく、他のユーザーとの関係性の中でユーザーの自己効力感みたいなものを刺激しながら何度もゲーム画面に向かわせる「仕組み」になっていることに気づくのは、やっとゲーム（というかそのつながり）に疲れて、ゲームかから少し離れられるようになった頃でした。

こうして考えてみると、「自分の書いたものを誰かに読んでもらい反応がもらえる」のが嬉しいのはもちろんのこと、「読んでくれた人がいる」だけでも十分に満足感が得られることなんだなと思います。それなのに、学校の英語の授業で書いた英作文が、先生が読んで赤ペンで文法やスペリングの間違いを修正するだけで終わり、というのはとてももったいないことのように思います。（そして不思議なことにこっちの「赤文字」はたいてい全然嬉しくない！）

SNS を模したコミュニケーション活動は、本家同様デジタル端末やネットワーク回線を用いてやればいいのかも知れませんが、GIGA スクール構想「以前」の中学校の教室では、アナログな形でしか実現させることはできませんでした。しかし、実はアナログであることによるメリットもたくさんあることに後々自分でも気づき、今では「あえて」アナログでこういったコミュニケーション活動に取り組むようにしています。

本ワークショップでは、「自分の書いたものを誰かに読んでもらい反応がもらえる」という感覚が味わえるライティング＆リーディングの活動を、参加者のみなさんに実際に体験していただき、この活動のポイントや注意点、さらなる発展の可能性などについて考えていただければと思います。そして、GIGA スクール構想がスタートした今となっては、教室にあるデジタル端末を「あえて」使ってこのアナログな活動を実施することも可能かもしれません。その可能性や注意点についても、みなさんと共有させていただくことができれば嬉しいです。

本ワークショップで実施予定の活動

①「COSMOS」…紙上でやり取りする Twitter や匿名掲示板のようなコミュニケーション活動

②「ポケモンライティング」…他の人に気に入ってもらえるようなポケモンの紹介文を書き、お互いに読み合う活動

※教室では完全にアナログでおこなう活動ですが、本ワークショップでは時間短縮のため一部デジタル機器を使用する場合があります。予めご了承ください。

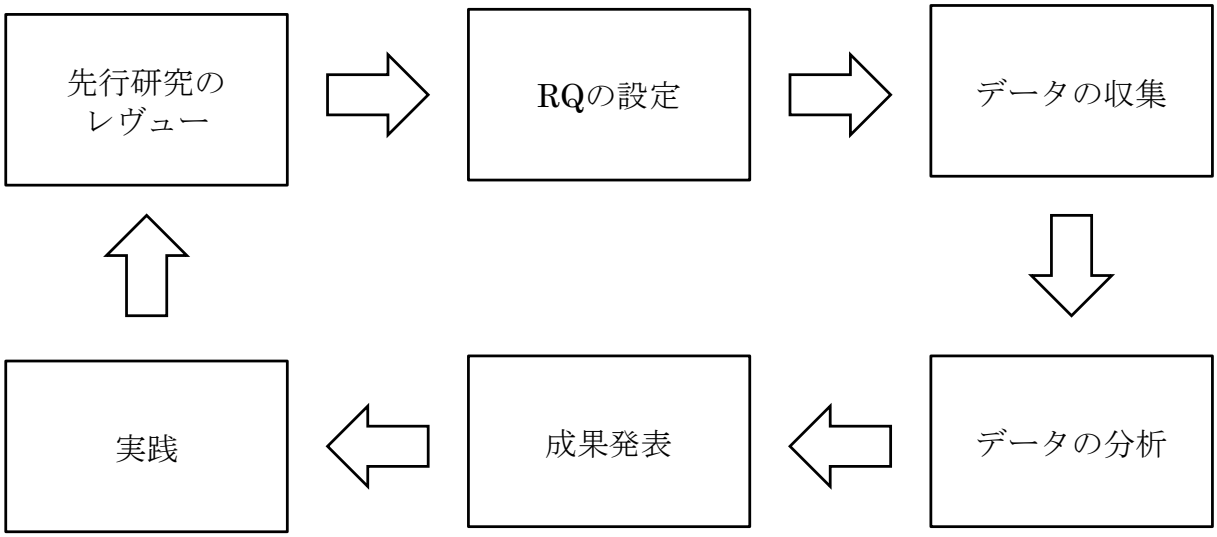
外国語（英語）教育学研究の進め方：いつ、どこで、何をするか？

鬼田　崇作（同志社大学）

本ワークショップは、これから外国語（英語）教育学の研究を行ってみよう、見つめ直してみようと考えている大学院生、教員の方を主な対象として、研究を進める各段階でどのようなことに注意をしながら研究を進めていけば良いのかについて、私のこれまでの経験をもとに話題提供をし、良い研究実践の方法についてともに考えていきたい。

外国語（英語）教育学研究は教育学、言語学、心理学など、周辺領域と関わりの多い学際的な研究分野である。そのため、研究の内容と方法は多岐にわたる。本ワークショップでは、外国語（英語）教育学研究において一般的な形の 1 つであろう実証研究を例に取り、研究の進め方を考えてみたい。細部において様々な違いはあろうが、実証研究では、概ね以下のような順序で研究を遂行していく（図 1）。

図 1. 外国語（英語）教育学研究の一般的な手順



先行研究のレヴューについては、ナラティブ・レビューおよびメタ分析などの方法があるが、研究者の興味・関心に応じて、批判的に先行研究を検討する必要がある。RQ（研究課題）の設定においては、FINER（feasible、interesting、novel、ethical、relevant）という枠組みが提案されており（Cummings et al., 2013）、外国語（英語）教育学の研究においても役に立つ枠組みであろう。データの収集および分析については、研究倫理、リサーチ・デザイン、近年の統計改革および再現性問題など、考慮すべき話題が多い。また研究成果の発表については、学会での発表、論文の投稿、査読者とのやり取りなどを検討する必要がある。最後に、研究と実践のあるべき関係について、参加者の先生方とともに考えてみたい。

Cummings, S. R., Browner, W. S., & Hulley, S. B. (2013). *Designing clinical research* (4th ed.). Lippincott Williams and Wilkins.

誰のための研究か、何のための研究か

パネリスト　浦野　研（北海学園大学）
田村　祐（関西大学）
南　侑樹（神戸市立工業高等専門学校）

外国語教育研究の対象は多岐に渡り、その全体像を俯瞰することは難しい。自分とは異なる種類の研究を目にしたとき、その研究がどのような背景や目的を持って行われているのかを正確に理解するのは容易ではなく、それに起因する誤解や軋轢が論文の査読や学会発表の場などで生まれている。本シンポジウムでは、研究者同士の相互理解の一助となることを目的として、第二言語習得研究と外国語教育実践研究を行う 2 名の登壇者にそれぞれの持つ研究と教育へのスタンスを語っていただき、我々が日々どのような考えを持って他の研究に向き合うべきか、何ができるのかについて検討したい。

英語教育と SLA 研究の距離感：理論と実践は往復するべきか

田村　祐（関西大学）

1.　はじめに

第二言語習得（SLA）研究とは，「第二言語はどのように学ばれるのか」についての学問である。SLA という学問の発展が言語教育研究と不可分に起こってきたこともあり，教育実践的な関心を持ちながら SLA 研究に臨む研究者も多くいる。また，「教育的示唆」が研究に求められることも多い。このときの教育的示唆とは，まさに「現場」で教える教師の教育実践に「役に立つ」という意味である。「理論と実践の橋渡し」といったスローガンが学会のテーマになることも多い。本発表では，福田他（2023）の議論をベースとしながら，理論と実践の往復が必要か，必要であるとすればどのような形が望ましいのかを考える。

2.　基礎科学と政策科学・応用科学

認知科学的なアプローチをとる SLA 研究のような「基礎科学」は，メカニズムの解明が主たる目的である。一方で，教育の効果などを扱う研究は，政策科学あるいは応用科学に位置づけられ，何らかの教育政策の提言やその評価のための科学である。寺沢（2015）が指摘するように，基礎科学と政策科学では求められる「科学性」が異なり，基礎科学で得られた結果を持って，例えば教育政策に対しての提言を行うようなことはできない。SLA 研究のすべてが基礎研究であると断じることはできないが，基礎科学志向のアプローチをもった研究はその影響が及ぶ領域を限定すべきであり，また，基礎科学と応用科学ではアプローチやそれぞれの領域での妥当性の要求水準が異なることを自覚すべきだろう。

3. これまでの研究方略の問題点と解決策

これまでの SLA 研究の多くは，何らかの現象を観察して分類し，その分類に基づいて概念間の関係性や影響関係を記述的に列挙してきた。しかしながら，このアプローチによって生み出された概念やそれらを用いたメカニズムについての仮説は数多く提案できる一方で棄却をすることが困難である。このことが原因となり，亘理他（2021）が指摘するところの公理や公理系と呼べるような理論的基盤が弱いままに記述的一般化が積み重ねられてきたのが SLA 研究だと言えるだろう。こうした流れを断ち切るために，米盛（2007）を参考にしながら，SLA 研究におけるより健全な研究サイクルを提案し，そこにより実践志向の研究はどのように貢献しうるかを議論する。

引用文献

寺沢拓敬（2015）「英語教育学における科学的エビデンスとは?:小学校英語教育政策を事例に」『外国語教育メディア学会(LET)中部支部外国語教育基礎研究部会 2014 年度報告論集』15–30.

福田純也・矢野雅貴・田村祐（編）（2023）『第二言語研究の思考法：認知システムの研究には何が必要か』くろしお出版

米盛裕二（2007）『アブダクション：仮説と発見の論理』勁草書房.

亘理陽一・草薙邦広・寺沢拓敬・浦野研・工藤洋路・酒井英樹（2021）『英語教育のエビデンス:これからの英語教育のために』研究社.

研究と修養としての実践研究—実践者の立場から—

南　侑樹（神戸市立工業高等専門学校）

本発表では実践研究を、「実践の理解や改善といった目的のために、教師自身が研究の主体となって、教室という文脈の中で、体系的な方法を用い、個人/協働で行う、公開を視野に入れた研究であり、実践の質の向上につながるもの」（田中ほか, 2019, p. 19）と定義する。

小中高および大学の現職教員や教職志望者を対象に調査を行った髙木ほか（2017）では、（実践）研究を行うことが難しい要因として、例えば「研究する時間がない」ことが挙げられている。しかし実践研究では、多忙な教育現場でも実践者が研究を無理なく行えることに主眼が置かれている。学術研究でも用いられるような質問紙だけでなく日々の授業実践で集積可能な記録（授業記録など）もデータとなり、研究の問いに関しては、必ずしも学術研究にもとづく必要がない。

実践研究では、実践のプロセスも肝要である。実践者は授業記録や省察を積み重ねるプロセスを通じて、自身の実践を理解し改善できるようになり、実践者の学習者観といった面の変容にも繋がる。さらに、実践のプロセスを公開することで、プロダクトだけでは見えない実践者の試行錯誤が見え、聴衆や読者にとって学びの機会となる可能性がある。そうしたプロセスにとくに実践研究の意義がある。

引用文献

髙木亜希子・酒井英樹・永倉由里・田中武夫・河合創・清水公男・滝沢雄一・藤田卓郎・宮崎直哉・山岸律子・吉田悠一（2017）.「英語教育における実践研究に関する意識調査」『教育実践学研究』22 号, 43–66.

田中武夫・髙木亜希子・藤田卓郎・滝沢雄一・酒井英樹　（編著）（2019）.『英語教師のための実践研究ガイドブック』大修館書店.

研究の成果を誰に届けたいのか

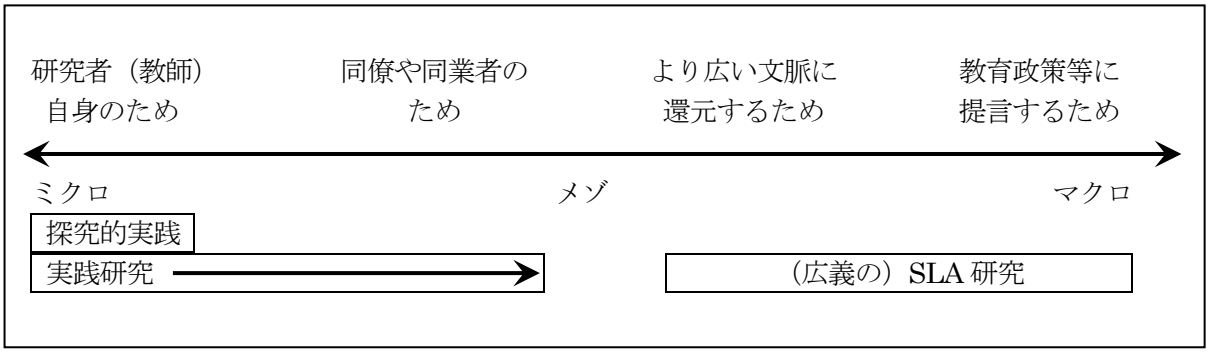
浦野　研（北海学園大学）

外国語教育研究の目的は、突き詰めれば外国語教育環境および学習プロセスの理解とその改善や効率化にあり、この点において実証研究と実践研究の間に大きな違いはない。一方で大きく異なるのが、研究成果を誰に届けるか、言い換えれば誰（何）のために研究を行うかである。実践研究や探究的実践（Exploratory Practice; Allwright, 2003）の出発点は教師自身であり、その目的は自らの実践を理解・改善することにある。関心が個人に向かうため、自身の置かれた環境（文脈）や日々の省察を報告することが求められる。実践の繰り返しや蓄積を通して立場の近い他の教師への還元が期待されることもあるが、報告内容が他の文脈でも適用可能かどうかは基本的に読者に委ねられる。

対照的に、実証研究、特に外国語教育への関連を謳う（広義の）SLA 研究では、特定の理論や現象、また指導法が出発点となることが多く、その成果は特定の教師でのみでなく、より広い文脈に還元されることが期待される。そのためには個々の研究において内的妥当性と外的妥当性が担保されることが重要であり（詳しくは亘理他, 2021 の第 2, 5, 6 章を参照）、一定の基準をクリアした研究が蓄積されることで、エビデンスとして教育政策等への提言が可能となる。

以上のように、研究にはそれぞれ出発点とゴール（適用範囲）があり、個々の論文や報告を評価する際にはこの点について意識する必要がある（図 1 を参照）。実証研究と実践研究では要求されるものも異なるため、一方の基準で他方を評価しないことも重要である。こういった点を踏まえた上で、我々は実践研究と実証研究にどう向き合うべきかについて、登壇者および参加者のみなさんと議論したい。

図 1．想定される研究の適用範囲



引用文献

Allwright, D. (2003). Exploratory Practice: Rethinking practitioner research in language teaching. Language Teaching Research, 7(2), 113–141. https://doi.org/10.1191/1362168803lr118oa

亘理陽一・草薙邦広・寺沢拓敬・浦野研・工藤洋路・酒井英樹（2021）『英語教育のエビデンス：これからの英語教育のために』研究社.

スピーチ課題におけるフィードバックの効果:ZPD に働きかける訂正フィードバックとリフォーミュレーションの比較

Comparison of the Efficacy of Corrective Feedback in ZPD and Reformulation on Speech Task

近藤　佐知（関西大学）

キーワード： 訂正フィードバック、気づき、ZPD、調整尺度、リフォーミュレーション

1. 問題と目的

SLA の分野では学習者のエラーに対し訂正フィードバックを与える事の重要性が指摘されている。本研究は、ZPD（最近接発達領域）に働きかける調整尺度(Aljaafreh & Lantolf, 1994)を用いた訂正フィードバック（CF-ZPD と略す）と、エラーを含む発話全体を修正する訂正フィードバックであるリフォーミュレーションの効果を比較する。前者はアウトプット促進型であり後者はインプット提供型である。このようなフィードバックを比較する事により、それぞれのフィードバックの効果と特徴を明確にする。課題は、先行研究で検討されてこなかった発話課題を採用した。RQ は、CF-ZPD を与える場合とリフォーミュレーションを与える場合では事前スピーチと事後スピーチでどのような変化が起こるのか、である。

2. 方法

12 名の大学生を半数ずつ CF-ZPD 群とリフォーミュレーション群に分けた。実験は 2 日間に分けて実施した。1 日目は 3 分間のスピーチ課題（スピーチ 1）と刺激想起を行い、2 日目は各群に異なるフィードバックを与えた。つまり CF-ZPD 群には、発話の中のエラーに対して調整尺度に沿ったフィードバックを口頭で与え実験参加者の自己修正を促した。リフォーミュレーション群には、実験参加者のスピーチ 1 のエラーを修正した上で、よりネイティブライクなスピーチに整えて口頭で呈示した。その後、1 日目と同じテーマでのスピーチ課題（スピーチ 2）と刺激想起を行ないフィードバックの効果を検証した。

3. 結果と考察

各群のスピーチ 1 とスピーチ 2 での平均エラー数は表 1 の通りである。CF-ZPD はリフォーミュレーションよりも誤り訂正率が高く、訂正率は前者が 71%で後者が 29%であった（表 2）。

表1. エラー数の平均値とSD

	CF-ZPD 群	リフォーミュレーション群
スピーチ1の平均エラー数	21.67 (5.43)	16.17 (8.84)
スピーチ2で修正されずに残った平均エラー数	6.33 (4.76)	11.50 (6.92)

表2. エラー数と修正されたエラー数の割合

	CF-ZPD 群	リフォーミュレーション群
スピーチ1のエラー数	130	97
スピーチ2で修正されたエラー数	92	28
スピーチ2でエラーのまま残った数	38	69
スピーチ1のエラー数に対するスピーチ2で修正されたエラーの割合（%）	71	29

また、質的分析では CF-ZPD 群の誤り訂正率が高いのは知識の一般化と間主観性の形成が生じたことによると考えた。この結果はライティング課題を用いた Aljaafreh & Lantolf の結果と一致する。一方、リフォーミュレーション群では表現の精緻化が認められた。これは実験参加者が発話時に感じた「言いたいけど言えない」というギャップへの気づき、模範例の呈示で受けた強い印象、言語的知識を想起させるフィードバックの役割に起因すると考えられた。

参考文献

Aljaafreh, A., & Lantolf, J. P. (1994). Negative feedback as regulation and second language learning in the zone of proximal development. *The Modern Language Journal, 78*(4), 465-483.

高校生へのライティング指導の在り方について:
フレームワークを用いた論理表現の取り組み

松木　龍太（大阪学院大学高等学校）

キーワード：　表現活動、英文エッセイ、フレームワーク

２０２２年度から高校では新しい科目として「論理表現」が導入され、そこでは表現の仕方に焦点を合わせて指導することが求められている。一方で、全国的な調査では、授業中の「書く」または「話す」活動の割合が低い現状がある。新しい科目導入を機に２０２２年度１学年から生徒の発信力を高める目的で英文エッセイを書く活動に取り組んだ。本発表は２０２２年度入学生徒を対象に英文の基本的な書き方を基に学期をまたがりどのような指導をし、学年が上がる中でどのような取り組みをしていくのか、今後の取り組みに関する言及も行う。

演劇ワークショップを通じた英語の表現力向上：プロジェクト発信型英語プログラムの取り組み

Enhancing English Expressiveness through Drama Workshops:
An Approach to the Project-Based English Program

大山　渓花（立命館大学）
近藤　雪絵（立命館大学）
木村　修平（立命館大学）

キーワード： 演劇ワークショップ，表現力，発信力

1. はじめに

近年の教育現場でのメディア利用の増加に伴い，英語教育の現場でも動画を用いた発信形式が注目されてきた。この背景を受け，立命館大学のプロジェクト発信型英語プログラムでは英語によるショートムービーの制作に向けて演劇ワークショップを導入し，ロールプレイなどを通じて生身の体を用いた表現力の向上を試みた。ロールプレイを授業に取り入れることは，「心理的安全性」や「楽しさ」を高めるという側面で有用であると考えられる（谷口ほか 2021）。本研究では，大学 2 年生向け必修英語クラス「英語 P3」への演劇ワークショップの導入とその効果について検討する。

2. 参加者と手順

参加者は，2022 年度春学期の 2 年生向け「英語 P3」受講者 11 名であった。今回は全 15 回中 2 回の授業内で演劇ワークショップを実施した。ACCD 大学コンソーシアムが運営を担当し，演劇現場での経験を持つ演出家や俳優がデモンストレーションと指導を行った。ワークショップでは 10 種類のワークが実施され，2 回のワークショップ終了後，参加者にフィードバックを求めるアンケートを実施した。

3. 結果と考察

参加者 11 名中 7 名が演劇的手法に興味を持った。講義や演劇鑑賞中心の受動的ワークが特に好評であったが，演劇未経験者には感情表現中心のワークは難解であった可能性が示唆された。一方，ドラマを創作・上演するワークは 11 名中 5 名の興味を引き，演劇的手法に興味を持った参加者の多くが創作や上演にも興味を示した。自由記述の分析から，ロールプレイを用いたワークでは，特定のキャラクターや台詞が与えられることにより，学生が自分と役を区別して自由に自己表現できる場が生まれたことが示唆された。日常社会とは異なる状況で「演じる」ことが，学生の表現力を高める可能性が見出された。

参考文献

谷口忠大・石川竜一郎・中川智皓・蓮行・井之上直也・末長英里子・益井博史（2021).『コミュニケーション場のメカニズムデザイン』慶應義塾大学出版会

反転学習形式の発音トレーニングプログラムの開発:授業外での動画視聴と授業内のコミュニケーション活動の連携を意識して

Developing a Pronunciation Training Program on Flipped Learning:
Integration of Out-of-class Video Viewing and In-class Communication Activities

近藤　暁子（兵庫教育大学）
山本　大貴（信州大学）

キーワード： 発音指導，反転学習，帯活動

1. はじめに

発音技能の習得は特に個人差が大きいと指摘されており(e.g., Purcell & Suter, 1980)、学習者ごとに必要な練習量も異なるため、他の技能と並行して指導を行う際に時間的制約が生じることが多い。この背景を踏まえ、オンライン授業外学習プログラムと、それに連携した帯活動形式で実施される授業内でのコミュニケーション活動などからなる反転学習方式の発音指導を実施した。本発表では、このプログラムの詳細と、その成果について報告する。

2. 参加者と手順

参加者は、国立大学の教育学部に在籍する大学生 32 名である。実践は、外国語（英語）科の教員免許取得希望者の必修授業で実施された。参加者の英語力は CEFR の B1～B2 下位レベル程度であった。実践の効果は、実践後に実施したアンケートと、参加者が実践前後の音読タスク・絵描写タスクにおける自身の発話を比較して成長した点と課題を書いたリフレクションエッセイを基に検討した。

3. 実践の内容

特に重要だと思われる指導項目（e.g., /r/と/l/, /ʃ/と/s/, /θ/と/s/, リンキング, 脱落, ストレス）を選定し、それらを 10 回（ただし、そのうち 2 回は復習回）にわけて指導した。実践は、授業外での解説動画・練習動画（合計 30 分程度）の視聴と、授業冒頭に行うペアでの発音確認・間違い探しタスク（たとえば/r/と/l/の回では rabbit, radio, lion などが書かれた 2 枚のイラストを使用）・リフレクション（合計 15 分程度）からなる。PPP を意識した構成となっており、参加者は、動画で発音に関する指導を明示的に受け、聞き取りや音読などの練習をしたうえで、発音を意識してコミュニケーション活動を行った。

4. 結果と考察

受講者のリフレクションエッセイの分析の結果、特に多くの受講者が成長を実感した項目は、/r/と/l/の発音とリンキングの技能であった。一方、特にストレスについては、改善の必要があると言及している学生が目立った。また、受講者への本プログラムについてのアンケートには、およそ 9 割の学生が楽しく学べたと回答しており、学習の満足度についても 9 割の学生から好意的な評価を得ることができた。記述式の質問の分析結果から、反転学習形式、授業内の活動デザイン（間違い探しタスク）、解説・練習動画などを効果的だと感じたことが、本プログラムに対する高評価の要因だと示唆された。一方、授業外で視聴する動画の長さ、動画の構成、動画視聴の動機づけ等に関しては、改善を要することも示された。

Purcell, E. T., & Suter, R. W. (1980). Predictors of pronunciation accuracy: A reexamination. *Language learning*, *30*(2), 271–287. https://doi.org/10.1111/j.1467-1770.1980.tb00319.x

UCHIDA

マルチメディア語学教育支援システム

PC@LL

ピーシーアットエルエル

ブラウザーで、場所、端末を選ばず語学の学習ができる「Web版ソフトレコーダー」

❶ **インストール不要！**
PCやタブレット等のBYOD、CYOD端末や、スマートフォンですぐに学習を始められます。

❷ **シャドーイング、ディクテーション、ロールプレイなど、語学学習の基本となる学習形態を高品質で提供！**
CALL教室での学習を普通教室や自宅などで行えます。

❸ Zoom、Microsoft Teams、Google Meetなどの**ビデオ会議ツールや、学習管理システム（LMS）と連携！**
ハイブリッド、ハイフレックス授業や、自宅での予習・復習など、幅広い学習形態に対応します。

❹ **教材や録音音声等のファイルの保存、共有、提出が可能！**
YouTubeなどのWebコンテンツも教材として活用できます。

既存システム

既存CALLシステム

moodle

●Moodle上のリンクからZoomを起動、授業開始

zoom

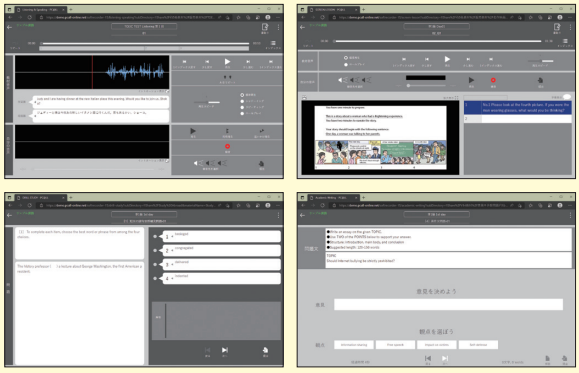
●データ移行

●認証連携（LTI）によるSSO

●画面や音声を共有

BYOD、CYOD 端末

Web版ソフトレコーダー



・マルチOS対応　・WEBブラウザで動作
・CALL教室と同等の学習を実現

シンクロ機能による一斉授業

1. 教員IDで ソフトレコーダーに ログイン
2. 使用する課題画面まで移動
3. ルートメニューから各アプリケーションを実行
4. 教材選択右側の「シンクロ」ボタンを押下

【留意事項】
・シンクロの動作は、シンクロ機能が実行された後からの操作が対象となります。
・シンクロ機能を実行する前の操作は学生に伝わりません。

受講者状況の画面に遷移後、「シンクロ開始」ボタンを押下。「出席中」の学生の画面に「シンクロを開始しますか？」という確認メッセージ（下図）が表示されます。

学生が「はい」のボタンを押下するとシンクロ機能が動作します。
「いいえ」を押下した場合、その学生にはシンクロ機能が動作しません。

シンクロ動作中の学生は、ソフトレコーダー上にメッセージが表示されます。

ビデオ会議ツール＋Web版ソフトレコーダーでのハイフレックス授業

授業開始時

全員がWeb会議とWeb版ソフトレコーダーに接続。

授業中

指示を元に、ディクテーション等の課題を行う。

Web会議を利用してグループディスカッション。

授業中

Web版ソフトレコーダー内にて、教員から課題を配信ことができるため、学生の混乱が少ない。
教員から学生への一斉操作（シンクロ）による指導も可能。

Web版ソフトレコーダーの画面

教員は、ビデオ会議ツールで画面を共有しながら、課題を提示したり、お手本を提示したりする。

全員で接続し、提出音声を聞き、教員の講評を聞く。

「Web会議」×「Web版ソフトレコーダー」で、教材の視聴や録音・書き取りなど語学を学ぶ様々な要素を取り入れた授業を、学内・在宅同一の環境下で実現できます。

内田洋行　高等教育事業部　西日本営業部 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2 ☎06(6920)2432　E-mail school@uchida.co.jp

Pearson

NEW TEST

Versant English Speaking and Listening Test

Versant Speaking Test のアップグレード版、Versant English Speaking and Listening Test が 2023 年 12 月に発売開始！

テスト時間を増やすことなく、より精度の高い評価、より優れたテスト体験に加え、新たにリスニングと Manner of speech のスコアを提供します。

Versant English Speaking and Listening Test の主な特徴

• 新たな設問タイプが追加（※受験時間は、従来と変わりません）

新たに、以下の設問形式が追加されます。

① Passage comprehension/Conversations（正確に話の内容を聞き取る能力を測定するための設問）

② Open questions（自分の言葉や考えを用いて話す能力を測定）※採点対象

• 新たな採点項目が追加

採点結果には、スピーキングの他、新たにリスニングと Manner of Speech（話しぶり）が追加。全ての項目でスコアと評価コメントが提供されます。

• AI を用いた採点の精度が向上

採点技術の向上により、より精度の高い評価を行い、採点不可となるテストを軽減します。

• 発音のバリエーションが追加

多国籍な人々とのコミュニケーションを想定し、出題音声には英語アクセントのバリエーションを増加。

• Global Scale of English（GSE）

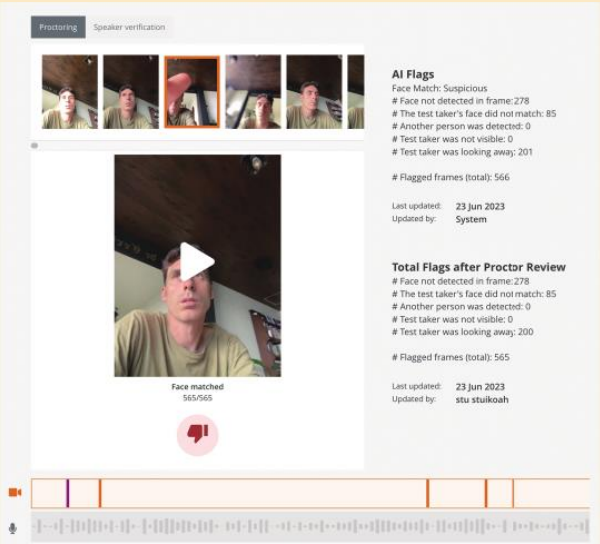
採点スコアは、Global Scale of English（GSE）で表示されます。

NEW OPTION Remote monitoring option

更に、リモートモニタリング・オプションが発売。

受験者の音声と顔を認証する「なりすまし防止」機能で、管理者の負担を軽減！

オフサイトでも、Versant の安全性を確保。リモートモニタリング機能は、アプリ及びウェブベースの Versant テストでご利用いただけます。



テスト管理者が確認できるもの：

AI が画像と音声により下記の項目を判定します。

- 受験者の顔が一致しているか
- 受験者がよそ見をしていないか
- 受験者の声が一致しているか
- テストに影響を及ぼす騒音があるか

など

先生、管理者のメリット：遠隔で受験者の受験状況を確認することができます。受験者の映像と音声にアクセスできますので、受験者へのアドバイスにも役立ちます。

ピアソン・ジャパン株式会社　お問い合わせ Email: elt.jp@pearson.com